

『人口減少の中でも 幸せ感を育む!』を考える

新潟産業大学附属柏崎研究所

主席研究員 春日俊雄

【はじめに】

日本の総人口は2008年に約1億2800万人でピークに達し、今後100年で100年前(明治時代後半)の水準に戻って行くと推定され、この人口

減少の流れは農山漁村地域や離島・半島等で行する形で進行している。私が現在暮らしている高柳町荻ノ島集落では、ここ

約200年間のうち100年で世帯数が30世帯から100世帯に増えて、その後の100年で

20世帯まで減っている。世帯数だけ見ると人口の減少度合いが既に地方都市の100年先に行っているとも言える。

そして、いまや地方都市においても消費人口の減少による地域経済の縮小、事業の担い手不足、地域交通の減便、医療サービスの限界、学校の統廃合、地域行事の維持困難、地域共同活動の担い手不足、空き家の増加リスク等々が生じている。

しかし、人口減少が避けられ

ない時代と考えるならば、幸せ感を高めながら上手に縮小することが現実的な対応の仕方であり、居場所感、つながり、健康、自由度など住民の幸せ感と生活の質を重視する。

・ 柔らかな共同体を作る。

・ 少人数でも機能が維持できる地域社会を作る。

・ 技術と機械力で足りないところを補う。

など考え方の転換と継続的なトライアンドエラーの取り組みが不可欠である。

今は亡き歴史学者の木村尚三郎氏は33年前に出版した「耕す文化の時代」の中でこれからの時代を「モノからヒト(心)へ」「モノから時間へ」「モノから知恵へ」と見立てた。まさに今の時代にドンピシャである。

【時代の変化と活動の 有り様】

これまで新春特別号の2024年度版では「地域エコシステム」、25年度版では「地域の仕

立て直し」の考え方を提案してきた。26年度版は「ポリフォニー(多声音楽)」を提案したい。中央アフリカのアカの人々が歌う音楽にポリフォニーと呼ばれる様式があり、アカの人たちは楽しいとき、悲しいときに皆で歌を歌う。全員が同じテンポ・リズムで動き、各人がそれぞれ異なる旋律を同時に歌って、しかも全体として一体感のある歌になっている。互いに協調の心がなければ成り立たない音楽である。

域づくりは、参加者全員が同じリズムで同じ旋律を歌う「合唱」のような取り組みであったように思う。しかし、現在はその地域の大きなリズムの中でさまざまなプレイヤーが異なった旋律(多様な生き方・暮らし方)を歌い、しかも「自分事」仲間事↓地域事↓世の中事」と柔らかくつながっている姿が見られる。

時代背景として多様な考え方や自分の人生を生きたいなどの思いがベースにあるのではないかと考えられる。今後さらに拡大していくと見ている。

【地域活動の視点】『人口減少が進む中でも幸せ感を育む!』を考える

R7.10.8 upd 柏崎研究所 春日

※いま住んでいる地域を自ら、そして共に耕していく心持ちを!

1. 地域の子カラを示す・魅せる <アウトプット>

(1) 「新しい価値・愉しさ」をつくる (前頭葉の活性化)

どんな方法で: 日常の営みの中で! 日々の学びの中で! 地域の発展: 一人ひとりの豊かさ、満足度の総和!

時間の堆積の中から魅力や価値を見いだす(風土・歴史・地域の本質) 愉しみ方・学び合う

(2) 地域内の「ゆるいつながり」をつくる (自分を高める&共生志向)

どんな方法で: 必要に応じて、互いの活動を知る一 個一ネットワーク化(共生社会: ベースは共感、ヨコの人間関係)

共創の可視化で共感による「ゆるいつながり」が生まれる。(地域の人・モノの循環)

(3) 地域内の「日常の豊かさ」をつくる&知る。(モノ<こころ中心、個<集団中心)

どんな方法で: ①「既存組織の機能アップ: 熟年+若者の参画、人口の減少に伴う組織の見直し、改善」

②「住民共創でニューインフラの充実(衣食住・地域内交流拠点・外とつながる拠点・自然との共生・行き場)」

③「美化(掃除)」④「地域を学ぶ」

2. 外との「つながり」をつくる <交流人口・関係人口>

どんな方法で: 地域の価値・愉しさを介した「ヒト・モノ・コトのつながり」(センス&オリジナリティがポイント)

効果〜「地域における人的活性化」「共生・支え合いの経済」「生産者VS消費者から共に豊かな生活者に」

3. 共に試行! 共に実践! する<自分の好きなこと、出来ることを出来る時に>

どんな方法で: トライアンドエラー! (共感する仲間と共に「愉しさを中心に据えて!」)

情報共有・必要に応じて連携・シンポジウム等の開催

4. 若い地域人材を応援する「空気・仕組み」をつくる<公・民・学連携>

どんな方法で: 「学」の地域探索活動により「問題・課題の発見⇒課題解決力、主体的学び力、ゆるいつながり力、共感力」を育む

※課題〜「地域の良さが伝わる仕組み」「地域で活躍できる知識・スキル・考え方を身に付ける仕組み」

「権限によらないリーダーシップ」「ミレニウム世代・Z世代の価値観」「活躍のスペースをつくる」

先導的な事例

人々を癒やしてきた。「奥の湯 湯元館」は1874年に開業。とりりと肌に馴染む柔らかなお湯は新潟県屈指の葉湯として知られ、150年間の歴史を有している。

最初にご縁をいただいた頃は近郷近在の日帰り入浴客や湯治客、各種催事の宴会が中心で施設も田舎の湯治場という雰囲気だった。現在は温泉の良質な泉質に加えて、山々に囲まれた一軒宿のイメージと厳選した地場ものの食材にこだわり、滋味豊かな料理と家族経営の温かな雰囲気が県外の多くの人々を引きつけている。



① 料理の修業をされていた息子さんが戻ってこられて、まず

地元の素材を使った料理の水準が飛躍的に向上したこと。
② 時代のニーズにこえるべく、毎年コツコツと施設改修を進めて来たこと。
③ 湯元館の魅力を上手に伝える情報発信を若女将が取り組み、認知度、満



④ 足度は格段に向上したこと。
④ 大変な時代の中で、この土

台を長年にわたり維持してこられたこと。



◎ふみこの植物園

(羽田文子氏・西山)

花が好きで、自宅前の庭で草

花づくりを始めて、やがてそれがライフワークとなり、育てた四季折々の草花を切り花にして

描き始めたのが絵手紙になった。いずれも独学で工夫しながら草花づくりは50年、絵手紙が15年になった。「ふみこの植物園」にはおおむね50種を超える草花が植えられており、季節ごとに次々ときれいな花で彩られる。

絵手紙は毎月30枚ぐらい描いていて、親交のある方々に届けられ、絵手紙を通じた交流も活

ここが凄い!
ここが凄い!

発に行われるなど地域の豊かな自然や温かな地域社会の中で幸せ感を持って楽しく暮らすことにつながる「生き方、暮らし方」の一つではないかといふ共感をした。

① 草花づくりや絵手紙を独学で学び、それを実践していること。(学ぶ1身に付けることを実践)

② 育てた草花を五感で絵手紙という情報化をしていること。

③ 親交のある方々に絵手紙でアウトプットすることは脳が喜ぶサイクルになっていること。

④ 「生涯の学び」を実践していること。

◎輝き農場

(代表 澁江嘉輝氏・鵜川)

今から10年前に長岡技術科学大を卒業して、学生時代に地域活動でお世話になった鵜川を元



の安全・安心と
食味にこだわっ
た米づくりがあ
る。



ここが
凄い！

- ① 大学時代の
経営情報科シス
テムを活(い)
かして事業をよ
り見える化し、
一年ごとに工夫
を積み重ねてい
ること。
- ② 新しい考え方と経営感覚で
事業への共感をベースに澁江フ
ァン等のつながりを確かなモノ
にしていること。
- ③ 売るモノを作る力、作った
モノを売る力が着実に伸びてい
ること。
- ④ 総体的に事業全体を管理す
る力に秀でていること。

気にするという志を持って女谷
に移住。近所の小野さん夫婦か
ら指導を受けながら米農家にな
るための研修を始めた。

10年後の現在、澁江氏はたく
ましく地域から頼りにされる存
在となり、主宰する「輝き農
場」は鶴川エリアで一番の大
農。7・5畝を耕作する米農家
に育った。

栽培しているコシヒカリやゆ
きん子舞は「あやこ米」として澁
江ファンのほか、多くの人々に
喜ばれて、継続的な関係を築い
ている。「輝き農場」のお米の特
徴は、何と言っても炊きたての香
りの良さとふっくら感にある。

その背景には、良質で豊富な
鶴川の水源と山間の気候に加え
て、有機質肥料も使いながら農
薬や化学肥料を減らすなどお米

◎アンビシヤン

(代表 田辺愛美氏・
高柳町岡野町)

生まれ育った高柳を盛り上げ
たいと勤めていた会社を退職し
て、4年前に創業した。ツクシ
の胞子が肌に良い効果を生むこ
とを発見し、その後の並外れた
行動力が不可能を可能にしたと

言っても過言ではない。まず成
分を科学的に検証することから
模索が始まり、協力者を得なが
ら困難を一つひとつ乗り越えて
つくし石鹸(せっけん)に仕上
げネット販売(通販)を基本に
事業を展開している。

地域の中で、初めてのコトに
取り組むのは、簡単にはいかな
い！と思っているが、持ち前の
粘り強さで良く乗り越えた。商
品化された石鹸は更にヨモギ石
鹸、スギナ石鹸、ド

クダミの花石鹸が加
わると共に野草茶の
商品化も進めてヨモ
ギ茶、ドクダミ茶、
ツクシ茶、スギナ茶
を販売している。こ
れらの商品は利用者
から喜ばれてファ
ンも着実に増え、首都
圏でも販売されて
いる。



ここが
凄い！

- ① つくし石鹸の商

◎グルグルハウス

(代表 今井伸治氏)

高柳町岡野町の中心部にアー
トを切り口にさまざまな活動を
している「グルグルハウス」が



品化にあたり、日本食品分析セ
ンターで胞子の科学的な分析を
行ったこと。

② ツクシの胞子を化粧品に配
合する方法が特許庁から認めら
れて特許を取得したこと。

③ つくし石鹸の開発にとどま
らず、次々と新たな商品開発に
取り組んできたこと。

④ イベント等に積極的に参加
して、相対をししながら地道にフ
ァンを増やしていること。

ある。同施設に入ると高柳の写
真や町史等の本がしつらえてあ
り、一目で高柳のイメージが伝
わってくる。そして、アケビ、
ヤマブドウ、クルミの木の皮な
どを使って編んだ手提げや籠、

「人口減少の中でも幸せ感を育む!」を考える

著名な作家の陶磁器などがたくさん展示され、アート活動の拠点となっている。

特にギャラリーでは、さまざまな作家とのつながりを基にクリエイターの高い作品を継続的に展示・運営するなど高い評価を得ている。

また、改築した家屋をアトリエとして若い作家に無償で提供し、「アーティスト・イン・レジデンス」の取り組みや「狐の夜祭り」に関する作品・資料の展示、地元酒蔵の商品開発に関わるなど地域活性化の一翼を担っている。



ここが凄い!

① 「デザインのチカラ」と「編集力」によって「課題発見と解決」のため創造的なプロセスの分野を担って地域の活性化を牽引してきたこと。



- ② アートやデザインが地域を美しく見せる単なる技術ではなく、「地域を元気にする知恵」であることを実践していること。
- ③ 「ソトとつながる窓」になっていること。
- ④ スペースの一部を創作場として提供していること。

◎ノマタ酒店

(代表 五十嵐健也氏)

店内には、市内をはじめ県内蔵元のお酒がところ狭しと並んでいてワクワクする。そして「成るほど!」と納得した。五十嵐氏の「好きになった!」で

チョイスしたお酒の並ぶ姿は、総体的にインパクトがあって分かりやすく、その意思が伝わっている。

五十嵐氏は、その志として「人は酒に酔わず、よき友に酔う」という情景を思い描きながら、日々の商いをしている

と言っ

明治の創業から数えて7代目で、お酒は「場づくり」という考え。「地域の中にさまざまな場がたくさん出来て和気あいあいとしている街がいい」という思いがあり、お客様や蔵元とのつながりを大切にしている。



ここが凄い!

- ① 地域と共に生きていくという考え方は、地域の人々の「ウェルビーイング」に重なること。
- ② お客様や蔵元との関係を大切なことと考えて、その関係づくりを大事な糧として日々精進されていること。
- ③ 住んでいる「新潟」で勝負



することが、全ての恩返しに通じると信念を持って取り組んでいること。

- ④ 地域内外のお客様とのつながる仕組みづくりを行っていること。

【まとめ】

時代が様変わりする中で、大方の地域では人口減少が進んでも地域を維持するための共同活動が不可欠となる。里山や農業施設、祭り、景観、文化、自然などの共同資源(コモンズ)を共感による外部人材との協働活動(オープン・コモンズ)が求められ、棚田保全においてはこの動きがすでに始まっている。

自らの地域の自治活動だけでは地域課題の解決は困難な状況を迎えており、「外といかに良好な関係でつながることが出来るか!」にかかっている。時代のキーワードはまさに「ソトとつながる」である。